

FGOのえちえち短編集

おっぱいサムライ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

思いついたタイミングで気ままに追加していく、一話完結式の短編集。
話のタイトル見れば大体内容が分かるようにしていきます。

目次

アンメアの備品にされたマスターが、無抵抗のままサンドイッチ状態で色々弄られびゆるびゆるする話	1
純白イチャラブお姉ちゃん水着、ジャンヌ・ダルク（鮫）と永遠の甘い夏を過ごす話	16

アンメアの備品にされたマスターが、無抵抗のままサン
ドイッチ状態で色々弄られびゆるびゆるする話

「ちう、ちゆ……んちゆ、ぢゆ、ぢゆッ、んっ……うう、はあ、ふう……ちゆ……」

夏の照り付ける強い日差しさえ届かぬ、青々とした竹林。

通り抜ける風のざわめきに混じって、何かを食るように吸い付く音が聞こえてくる。

白と赤、大小組み合わさった女が二人。

一人の男を挟み撃ちにするような形で、その肉体を端から端まで堪能している真つ最中である。

男が背を預ける女、身長が百七十ほど、ブロンドの髪を二つに分け、宝石のルビーを
思わせる丸い目からは人懐っこそうな印象を受けるが、瞳の奥底に獣のごとき暴力性も
感じ取れる。

十五キロほどのフロントロック銃を軽々と振り回す剛腕の持ち主であり、ひとたび
ぎゅつと抱きしめられたなら、常人がその抱擁から逃れるのは不可能である。

胸部にはヒトの頭より大きなメロンがふたつ、どたぶんと鎮座しており、頭を挟み込
む至福の柔らかさもまた、逃げる意欲を削ぐ要因であった。

反対に男の正面で膝を付き、彼の硬く滾った肉棒にむしゃぶりつく女。

背丈は百六十よりやや小さく、淡い水色を含んだ白髪に赤のカチューシャ、顔の大きな刀傷が特徴的で、身体や足にも所々同じような傷跡が散見されることから、相当な修羅場をくぐり抜けてきたと推測される。

ややとつつきにくい印象で、ブレーキ役を兼ねた常識的思考の持ち主であるはずの彼女。

それが今や頬を上気させ、口元が汚れるのを厭わず一心不乱に陰茎をしゃぶり尽くす様を見るに、夏の誘惑に充てられてタガが外れてしまったのだろうか。

——それは否。隠しているだけで、元よりこの女も獣なのだ。

「んんっ、じゅぶぶっ……んぶっ、ちゅ、ぢゅっ、ちゅ……うう……ん……」

餌に食いついた魚が決してその口を離さないかのように。

あるいは、釣り針が刺さって離れられないかのように。

水色の少女は口内いっぱい男性器を頬張ったまま、顔を腰に密着させてじゆるじゆると窄めていく。

「んっ、んふう、ちゅ、んちゅ、ちゆるちゆるちゅううう……ん、ふあ」

音の出処は一つではない。

もう一人の長身の女が、深い接吻と同時に自らの舌を男の口へねじ込んでいく。

ねっとりとして押し付けられた唇、そこから舌の侵入を一度許してしまえば、後は執拗に絡められ、唾液を注がれ、れるれるちゅぷちゅぷ、口内を隅々まで犯されてしまう。

熱く濡れた感触がぬるぬると蠢き、時折頬肉をなぞられる。

くちゅくちゅと粘膜同士が触れ合う淫靡な音が体の内側より響いてきて、男は堪らず足の力が抜けそうになった。

二人の絶技が織りなす二重奏は、じわりじわりと男を絶頂へと導いていく。

男——かつて人理焼却に立ち向かい、今なお、異星の神の侵略に抗う役目を負ったカルデアのマスターは、特別な才を持つわけでも、卓越した武を誇るわけでもない、ありふれた人間の一人だ。囀作戦をまんまと突破されれば、こうなることは自明の理である。

ラスベガスを舞台に繰り広げられた水着剣豪・刑部姫率いるチームH I M E J Iとの一戦。

敵チームの一員であったアン・ボニー、メアリー・リード兩名をおびき寄せて討つため、マスター自身を餌にするとところまでは順調だった。

相手側が行った反則「メアリーを備品扱いにすることで、一枠に二人をねじ込む」を

逆手に取り、「こちらのマスターも備品であり、戦闘人数には含まれない」という建前であちらの油断を誘い、二人が肉食獣の片鱗を現したところで奇襲を仕掛け、そのまま倒してしまおう算段だったのだ。

ここで誤算が二つ。

一つは、彼女たち海賊の強奪略奪にかける情熱を見誤ったこと。

もう一つは、奇襲にもってこいのはずの竹林が思わぬ形で裏目に出たことだ。

キヤリコ・ジャックの船員の中で唯一海賊であったと称され、かつては狂戦士とも、死を告げる妖精とも評された戦いぶりを披露したアンメア組と謂えども、狂人以上に手段を選ばない戦士・宮本伊織の猛攻を凌ぐには至らず、敗北必至と思われるその時、アンの視界にあるものが映る。

アイコンタクトは一瞬。メアリーが前へと躍り出て、迫る二刀のガン・ブレードに対し、ピストルソードの両刃を駆使して、必死の思いで捌く。二発同時発射を可能とする特殊機構も、銃弾ごと容易に斬って対応してしまう宮本伊織の前では有効打になり得ない。

稼げる時間はほんの数秒程度、だがその数秒があつてこそ、アン・ボニーは標的を正確無比に狙うことが出来る。

銃声が一発、鳴り響いた。しかしその銃口は、一見して誰を狙い撃ちしたわけでもな

い、でたらめな方向を指しているようであった。ところが、彼女の意図は数秒も経たないうちに、その場にいた全員が思い知ることになる。

次の瞬間生じたのは、竹林の隙間を突き抜けるかのような爆風。

アンが狙ったのは、マスターと遭遇する前に仕掛けてあつた爆薬を仕込んだ大樽であつた。

その位置は丁度、竹の地下茎が他より枯れていた地帯である。

ただでさえ竹は地表から三十センチほどしか保持できないにも関わらず、それ以上に土の保持力が弱まっている箇所を刺激したものだから、あつという間に土砂崩れへと発展してしまつた。

味方同士が分断され、連携が乱れている隙を逃さなかつた海賊コンビは、どさくさに紛れてマスターというお宝を奪うことに成功したのだつた。

「かぁーこいつはたまげた。してやられたつて感じサ」

セイバークラスに模様替えした葛飾応為が、後でそうぼやいてしまつたのも仕方ない。

予想だにしなかつたスケールの大きな戦術で作戦を破られ、暫し途方に暮れるしかなくつた。

加えてそこに襲来してきたのが、鋼鉄天空魔嬢・メカエリチャン二号機である。

泣きつ面に蜂とはまさにこのこと。

カルデア組は大きく足止めを食らい、結果的にアン・メアリー両名がマスターと三人つきりになる時間を十二分に与えてしまうのだった。

「んんっ、ぢゅぶっぢゅうっ、ぢゆるぢゅ！　ず、ぢゅぢゅぢゅ、ん、ふっ、むぢゅっ、ほふう、ぢゅっぶぢゅっぶぢゅぶぶ……」

息継ぎする間も惜しいと言わんばかりに、吸い付きの激しさが徐々に増していくメアリー。

もう最初に聞かされていた話と全く違うな、とカルデアのマスターは快楽に吞まれる最中、僅かに残された冷静な部分で振り返る。

——普段では出来ないことをたくさん致しますわよ♡

と言ったのはアンであったが、抱き締めたり、頬ずりしたりという、初めに提示された範疇を余裕で飛び越えて来るあたり、さすが望みを手にするためならどんなアクションも起こす行動派の鑑である。

彼はかつて無人島に飛ばされて開拓事業に勤しんだ際に、出来上がった狭いシャワー室内でアンとメアリーの二人に挟まれたまま、洗いっこを敢行された経験を思い返して

いた。

シャワーの水音にかき消されるのをいいことに、後ろからはアンが耳輪をなぞるように舌で舐め上げ、前方のメアリーは緑のトランクスの中へと指を這わせて亀頭を弄り回すものだから、カルデアのマスターはテントが張るのを抑え切れず、そのまま魔力補給を理由に美味しく頂かれてしまった。

現在、マスターはあのとときと違って開放的な空間に身を置いているものの、鬱蒼たる竹林の中ではどの道逃げ場も無い。

女海賊二人の「備品（モノ）」として、一切自分からは手を出すことは許されず、しかながらどれだけ不躰な視線を向けてもお咎め無しという特殊な立ち位置のまま、男性器を含め身体の至る部分も好きに扱われる運命を受け入れる他なかった。

「ぢゅ、ぼ、ぶつ、ぢゆるるるるるるるつ、ぢゅ、ちゅつ……ちゅうううううううう」

メアリーの口腔粘膜にねっとり絡みつかれたまま、丸ごと吸い尽くす勢いで啜り続けるフェラチオを前に、射精を我慢するのも限界に近いマスター。

それを後方から察したのか、アンは口吸いを中断すると、その大きな手の指先にキスで混ざり合った粘液をまぶしていく。

くちゅくちゅと、人差し指と中指の間で糸を引いている様をマスターへ見せつける、そのまま彼のシャツを捲り上げ、露わになった乳輪をなぞるように弄り始めた。

「ふふつ、マスターの乳首がぴんと立っていますわね。わたくしに口内を犯されながら、
メアリーが夢中になって吸い付くさまをじっくり見て、興奮している証ですもの。こち
らも丁寧に、可愛がって差し上げますわ」

アンは囁くように耳元で告げると、彼の首筋に舌を這わせながら、乳輪の周囲をぐる
ぐると撫でまわし、次第にその円を小さくしていく。

ちりちり疼くようなむず痒さが伝播するにつれ、首から胸部へと掛けて甘く、甘く快
感が蕩けて染み込む。

不意に粘ついた二本の指で乳首の先端をそつと挟んだかと思えば、勃起した先端を小
刻みに揺らし、コリコリと微弱な刺激を与え続ける。

快楽のスイッチを順次押されていくにつれて、脳へと伝わるぴりぴりした快感は強さ
を増していき、彼の肉棒は今にも精を吐き出したようにピクピクと跳ねている。

絶頂への合図を受け取ったメアリーは、ラストスパートをかけてきた。

「んふう、ふ、うっ……ぢゅぷつ、ぢゅつ、ぢゅつ、ぶぶつ、ぢゅぷつ！ ぢゅ、ぶふうう、んぢゅ
るるつぢゅ、んんう、ぢゅつ！ ぢゅつ！ ぢゆるるるるつ、ぢゆるるるるるるるるつ!!」
根こそぎ搾り取られそうなほど力強い吸い付きは、もはや引き？がそうとしても外れ
てはくれない。言葉を発せずとも、発情した兔のように無我夢中なノーハンドストロー
クが告げている。

——マスターの精液、僕のお口に注いで欲しいなあ……

潤んだ空色の瞳。上目遣いでねだられたのが、マスターへの止めの一撃となった。

「んぐう!? つく、くんんんううううッ!! ……」

アンによって出来上がった身体での射精は、通常の何倍も長く、そして濃厚だ。

度重なる愛撫によって蓄積された刺激が、一気にスパークを起こす。

メアリーは洪水のように溢れ出すザーメンに一瞬驚いたものの、吐き出すことなく喉を鳴らして飲み干していく。

「ん、んう……くう……つ、は……ん、じゆるじゆる、ちゅつぶちゅつぶ、ちゅぽっ」

射精の脈動から暫くして、ようやく口を離れたメアリー。

その小ぶりの唇から亀頭に架けて、分泌された唾液と吐き出された精液が混じり合った、てかてかの薄い白濁色のブリッジを形成している。

「マスター、沢山お口の中に出せたね。うん、偉い偉い」

呆けた状態のマスターに対し、頭を撫でながらメアリーが言う。

満足感で一杯の、いい笑顔を浮かべていた。

「あら、メアリーったら。この前、妹指定されたのが余程お気に召さなかったのですね」「こら、そのことは掘り返さないでよ。僕だって本当はお姉さんなんだし、何も間違っていないんだからね!」

一転してむすつとした顔へと変わったメアリーを尻目に、今度はアンがマスターの前
方へと移動する。

彼の腰へ両手を伸ばすと、前かがみの姿勢を取り、たぶんたぷんと弾む爆乳を白ビキ
ニのフリル越しにおちんちんへ乗せていく。

相当なスペルマをメアリーに御馳走した後だというのに、規格外のポリウムを目の
前にして滾りが収まらないのか、マスターの逸物は再び元の猛々しさを取り戻していっ
た。

「うふふ、正直で大変よろしいですわ、マスター♡」

たゆん、と指で押し込んだかのように、爆乳おっぱいへと沈んでいく亀頭。

ビキニに出来た、ふくよかな生地の凹み具合が柔らかさを物語っている。

ますますガチガチに勃起していく陰茎を目視し、上機嫌のアン。

得意げな顔を隠そうともしない。

当然面白くないのはメアリーの方で、不機嫌オーラを隠すことなくマスターの後ろへ
と移る。

「ふーん、だ。そうやって目移りするマスターには、もつとキツイのをお見舞いするか
ら」

膝の位置に留まっていた迷彩柄のアロハズボンをも、更に下へと降ろす。

セルライトの無い、引き締まった青年のヒップの割れ目に、先刻までおちんちんにしていたようなメアリーの吸い付きが予告無しで炸裂した。

「じゆるじゆるじゆるじゆる、ちゅぶ、くちや、ぶちゅうううう……」

肛門へじんわりと広がる熱く湿った感触に、目が点滅するような快楽を覚えてしまうマスター。入り口付近を舌先でチロチロとノックされたかと思うと、広げた舌のザラザラで周辺をねっとり撫で回される。お尻を刺激されればされるほど、ペニスへの血流は増していき、とうとう射精前よりもいきり立った剛直に変貌する。

「ふふふ、ではわたくしからも失礼しますね」

—— ぱちゅん。

大きく開いた胸元を寄せ、ビキニを着たままでも正面からおちんちんを包み込んでしまうアンの爆乳。

カルデア内でも随一のサイズを誇る乳房は圧巻であり、軽くJカップは越えるであろう柔乳がもたらす包容力。

苦し気に勃起するペニスを優しくあやしながら、吸い付きの良い乳肌により断続的な心地良さを与えていく。

もち米のような弾力に潤いを兼ね揃えた、まさにダイナマイトなおっぱいだ。

「こうしてゆさゆさと揺らしたり、左右交互に動かすのは大変評判がよろしいのですが、

マスターは……聞くまでも無いようですわね♡」

「むっ……さつきまでお尻を舐めるたびに素っ頓狂な声で喜んでた癖に、すぐおっぱいに靡いちやつてさ」

むきになったメアリーは肛門内部へと舌をねじ込み、吸い上げながらリズムよく出し入れを繰り返す。

唾液を垂らしてぬめりを良くしたからか、ぢゅぽぽぽつと先程までとは比較にならない淫靡な水音を鳴らし、執拗に責め上げていく。

お尻の快楽から逃れようとすれば、当然腰をアンの爆乳へと押し付けてしまう。根元まですっぽり埋まった状態で、ずりゆずりゆと挿乳を繰り返すため、メアリーがアナルを舐め上げるほどおっぱい肉の快楽に嵌っていく図式が完成する。

マスターがアナル責めの気持ち良さから不規則に痙攣しても、一切はみ出ることのないK点越えおっぱい。

腰までも溶かされそうな感覚に陥っていく。

「マスター、足が震えて辛そうですわね。我慢する必要はありませんわ……そのまま身体をわたくしの方へと預けて、胸の柔らかさを堪能し、どろどろの欲望を吐き出してください。それこそ、メアリーのお口に注いだよりも沢山、ね♡」

——にちにち、くちやくちや、じゆるじゆる、ぱんぱん。

脳内をかき混ぜられたような快樂信号のオンパレードに、意識が浮遊していくマスター。

今聞こえる音は尻を舐め上げられている音なのか。

それとも、乳肉と交じり合う肉棒から発せられているのか。

激しさを増していく淫行に吞まれ、もう判別すら付けられない。

後はもう、流されるまま腰を突き出して乳肉へと沈み込む快樂に溺れるだけだ。

間もなく発射を告げる余裕もないまま、二度目の絶頂がアンの乳まんこをびゆくびゆくと満たしていった。

「……あらあら。マスターの射精、全然止まりませんわね。包み込んでいるわたくしの胸から、熱い迸りがどンドン垂れていきますわ」

どつどつどつ、などという振動音が聞こえてきそうな程、震えの収まらない乳内射精。

しっかりとアンが両手で押さえていようと、爆乳を孕ませる勢いの射精量の前では隙間から零れ落ちるのを防ぎ切れない。

放出が完全に落ち着いたところには、アンのビキニの白が元の生地なのか、それとも精液が染み込んだ部分なのか、判別がつかないほどの子種汁をぶちまけていた。

前は精液塗れの陰茎、後ろは唾液塗れの尻穴。

下半身の感覚が消えてしまったと錯覚するほどの天国を味わい、マスターはどうとう

立っていられず地面へと寝転がってしまった。

「……メアリー。残念ですけど、本日はここまでのようです」

「えっ？ でもまだ……ああ、見つかつちやったかー」

接近してくる魔力反応が四つある。

つまり、カルデアの皆がとうとうマスターの位置を特定したことに他ならなかった。

「時間切れですわね……さすがにもう一度相對したら逃げられませんもの」

「仕方ないか。まっ、後はマスター次第つてところだね」

メアリーの発言に要領を得ず、彼が重たい頭を持ち上げて首を捻ると、

「ほらマスター、忘れてない？ チョコと一緒に渡した『アレ』だよ、『アレ』」

アレとは勿論、二人が渡してくれるバレンタインチョコに毎度のごとく仕込まれている、『何処かの部屋の鍵』である。

「もう、毎年改めてお渡ししてきますのに、訪ねてくる気配が一向にありませんもの。少しぐらいフライングで手が伸びてしまったとしても仕方のないこと、ですわよね？」

「備品扱いが物足りなくなったら、さ……いつでも待つてるからね」

主従ではなく対等を求める彼女らにとって、フェラやパイズリという行為もまた、相手のための奉仕だけではなく、自身の吸精欲求を満たすという意味合いも強い。

それが本番行為となれば尚更のこと。

到底短時間で収まるはずもなく、この場はお開きとするしかなかった。

しかし、順調に楔は打たれている。遅かれ早かれ、彼が部屋の鍵を使う日はやってくるだろうと二人は確信していた。

ジョン・ラカムという恋仲の男がいた時でさえ、アン・ボニーは当時三十を過ぎ、細身で凛々しく勇猛果敢であった男装のメアリーへと思わず求愛した。

そのメアリーはラカム一味最後の日、船員たちが怯えた野良犬のように逃げ惑う中でも、アンと肩を並べ力の限り相手に立ち向かった。

自由を「自らに由ること」と解釈するならば、だ。

世間的には乱暴者や淫乱と疎まれるであろう、それらの選択を自らの意志と責任で決定し、自分に依って立っている二人はまさに、自由な魂を持つ者。

海賊とは、誰も彼もがその自由を愛する権利を平等に有する世界だ。

故にこの先も、アン・ボニーとメアリー・リードは留まるという選択肢を選ばない。

華麗なる二人組として、どれだけ蠱惑的なサーヴァントが増えようとも、決して劣らぬ魅力でマスターを誘惑し、“お楽しみ”を続ける自由を謳歌するのであった。

純白イチャラブお姉ちゃん水着、ジャンヌ・ダルク（鮫）と永遠の甘い夏を過ごす話

一。

黄金色の麦畑は、例えるなら陸の海だった。

潮騒しほざいにも似たドンレミのそよ風によるさざめき。

ゆらりゆらりと濃淡を変える穂の群れは、白雲と共に移り行く海の色を想起させ、幼かった彼女の好奇心をいっぱいに満たした。

しかしどれだけ大海原を幻視しようとも、所詮は麦畑である。

うねる波のしぶきも、陽光に照らされる浜辺も、鼻を突き刺す海藻の匂いもなく、ただ無限に広がる蒼穹のみが唯一の共通点だった。

——海を見てみたい。

聖女と呼ばれる前、ただ日常を謳歌する少女であった頃に抱いた、些細な夢。

全てが終わりの己の運命を悟った後、泡沫のように湧いては消えていった、美しい夢物語。

その純情は後に小さなサンタが受け継いだものの、燻る願望は未だ奥底に眠っていた

らしい。

善性と規律を尊び、主への信仰を捧げる聖女ジャンヌ・ダルク。

時に要塞とも称されるほど鉄壁の精神に、ほんの少しの綻びがあるのだとしたら。

それは世界の裏側でいつかを待つ「星を撃ち落とす者」か、或いは無くせなかつた「海への憧憬」か。

夏の魔物が付け込むとしたら、恐らく後者なのだろう。

——ガール・ミーツ・ドルフィン——

ケガを治すために契約を結ぶというメルヘンチックな出会いを果たしたイルカは、本当にただのイルカだったのだろうか。

信仰の対象は原初の風景である海へと変わり、夏を尊ぶ精神は見え隠れしていた姉弟願望を剥き出しにした。

あの終わらない七日間の世界に平然と混ざり込む海洋生物がいるのだとしたら、それはひよっとすると——旧神の戯れなのかもしれない。

二・

朝五時の光、ラスベガスの日の出。

微睡みから解き放たれるにはまだ早い時刻。

少年は靄のかかった頭で、僅かに残った夢の記憶を思い返していた。

正確には自分の夢というより、誰かの夢を投射して見ているような感覚だった。

季節は夏、太陽の視線を浴びて煌めく海。

それを扉の奥から静かに眺めている女性がいた。

農村の麦畑よりも一層深く彩られた金髪を、腰にまで届くほどに長い三つ編みで結んでいる。

意志の強そうな紫の瞳から、一滴の雫が零れ落ちた。

きつと悲しんでいるのではない、噛み締めているのだ。

紅蓮の炎に身を捧げようとも決して忘れなかった、彼女だけが持ち得る唯一無二の感動を。

少年はその人物を知っているような気がした。

多大な恩を受け、幾多の思い出を共有し、無数の戦場を駆け巡った。

偉大なる先達の一人として、御旗のもとに大きな背中を示したその人の名は——
何だっただろうか。

もぞもぞ。

何かがベッドの中で蠢いている。

気づくと同時に少年はぴくりと身体が跳ね、思考を中断させられた。

水分不足で足が攣ったから、ではない。

生温かいぬめりをまとった軟体の感触が、朝立ちの収まらない逸物へと巻き付いているからだ。

竿肌をねちっこく丹念になぞり、カリの窪みに沿って大きく回される。

亀頭に浴びせられる吐息の熱が、明らかに誰かの口内へ肉棒が囚われていることを証明していた。

毛布に包まれた膨らみが妖しく上下するたび、たつぷり唾液を含んで啜りあげる音が洩れて聞こえてくる。

もはや歯を食いしばって耐えるのも限界だった。

少年は堪らず一枚布をめくり上げる。

「あ、起きちゃいました？ おはようございます、我が親愛なる弟」
カーテンの隙間から差す日の光に照らされた、金の三つ編み。

まるで軽い悪戯がバレてしまったおてんば娘のように、悪びれる様子もなく朗らかな笑みを浮かべるその人物は——紛れもなく、夏のお姉ちゃんであった。

「もう、ダメですよ。添い寝しているお姉ちゃんの太ももに、こんな固いモノを擦り付けたら。昨日だってあんなに愛を確かめ合っただのに、元氣な弟クンです」

そうだっただろうか。

少年は昨晚のことなのに、はつきりと思いつくことが出来ない。

だが、彼女がそう言うのならきつとそうなのだろう、と結論付ける。

何より弟はお姉ちゃんに従うものだ。

猥褻的な彼女の態度に、偽りなんてあるはずがない。

「んっ、ちゅうう……こんな熱く滾らせて……朝からお口に入りたいたいなんて我が儘な弟です……でも大丈夫、すぐにお姉ちゃんに満たしてあげますからねー」

少年が制止する暇もなく、肉棒全体がずりりと口内へ引きずり込まれてしまう。

膨張した逸物を口いっぱい頬張り、口腔粘膜でねっとり包んで離さない。

先ほどまで毛布の中で行われていた口淫を、これからまざまざと見せつけられる。

それだけでも興奮に値するのに、熱で潤んだ上目遣いをするものだから、ますます肉棒が硬くなってしまう。

弟の情欲に塗れた顔を見て満足したのか、夏のお姉ちゃんはじつくりと口の中を動き始めた。

滑らかに舌で肉竿を舐め回し、寝汗で蒸れた竿肌の上に唾液を余すことなく塗りたくっていく。

「れる、じゅるるっ、ちゅ、ぢゅっ、ちゅ……はふっ、はむっ、ちゆるちゅむぢゆるるる

く……」

裏筋にも舌を這わせて滑りを良くすると、根元までがっぽり啞え込んで吸引して行く。

喉奥にまで届いてしまうのではないか、と思うほど深く咀嚼された肉棒。

姉を名乗る女性は清純で美しい顔を股間に深く沈め、精を搾り取ろうと容赦なく頬を窄める。

朝の爽やかさには似つかない、情欲を昂らせる淫音が部屋を満たしていく。

「んっ、ぢゅぶっぢゅるるるっぢゅるる、ぷはっ……もう限界が近いようですね。誤魔化しても分かりますよ。弟のことは何でもお見通しなのが、お姉ちゃんなのです」

一旦ペニスを口から離し、えへんと自慢気な表情を見せる姉。

それとは対照的に、少年はもう息も絶え絶えといった様子である。

彼が目を醒ますよりも前から陰茎を刺激されていたらしく、射精の閾値を超えるのもそう遠くはない状態だ。

強烈な快樂の余りシーツを強く握りしめてしまったのか、皺がくつきりと浮き出していた。

「さあ、いつものようにお姉ちゃんに委ねてください。力を抜いて、心を気持ちよさで満たして……出したいときに出してくださいね」

そう言ったのを皮切りに、舌による愛撫が再開された。

竿の表面をじつくりと撫で上げ、柔らかい唇で亀頭を優しく啄む。

小気味いいリップ音が奥へ奥へと快楽を蓄積していく。

少年は何かを言おうとしたが、情けなく喘ぐ声しか出せない。

魅惑の口技に囚われた思考は射精への欲求で一杯になりつつある。

その欲望を解放してあげようと、再び肉棒が口内へ呑み込まれていった。

「じゅるっ、じゅるるるるるっ、じゅっぶ、じゅるっ、じゅるっ、んふっ、うっ、ぢゅっ！

ぢゅっ！ ぢゅるるるるっ、ぶぶぶっ、ぢゅほ、ちゅるるうううう」

喉奥の熱で肉棒が融けてしまう、そう錯覚するほどの快感。

溜まった欲望が尿道へとこみ上げてくる。

がちがちに硬くなった逸物を一切の合間無く吸い尽くされ、背中が弓なりになるほど

腰が浮いてしまう。

もう出る、イク、無理、許して、思いつく限り降参の言葉を発する少年。

その結果は、ますます激しいストロークを助長しただけだった。

浮いた腰があつちりと抱えられ、ディープスロートの餌食にされる。

そこから数秒、少年は涎を垂らしつつも天を仰いで耐えていたが、ふとした瞬間に目

線を下ろしてしまう。

剛直をばつくりと唾え込み、カチューシャがずれるほど顔を左右に捻って搾り取ろうとする淫猥な姿。

それだけ激しい口淫なのに、紫の瞳はよがる少年の変化を見逃すまいと変わらぬ目遣いで見つめていた。

その、妖しい情念と目が合った瞬間、押し留めていた絶頂感が一気に膨れて弾けた。

「んんっ!? んっ、んむっ、んゝっ……はあむ……ん……」

勢いよく跳ね出す精液が口内を叩きつけていく。

一瞬だけ目を見開いた彼女だったが、慣れた口捌きでそれを受け止めると、唇と舌で優しく射精の脈動を促す。

少年の腰を押えたまま、ノーハンドフェラで残った種汁も啜り上げる。

かなりの量を口に注がれたためか、柔らかな頬が若干膨らみを増している。

肉棒から吐き出された全てを口の中に溜め込むと、絶頂の反動で呆然と見下ろす少年の前で、そのまま躊躇うことなく熱い体液を飲み干していく。

こきゅ、こきゅ。

こつてりと粘っこい汁のため、絡みついて飲みにくいのだろう。

喉を鳴らす音が少年の耳にもはつきりと聞こえた。

「…………ふう、ごちそうさまでした。朝からこんなに沢山出せてしまうなんて、さすが我が

弟です……ん？ 何もわざわざ飲まなくても良かったのに、ですか？ それはいけません。弟のモノはお姉ちゃんのものでですから、一滴でも無駄にしないのが鉄則です」

他所では聞いたことのない姉理論に少々辟易するも、それを喜んでいる自分がいる。少年はどこか落ち着かない気分を抱えていた。

「さあ、ちゃんとスッキリしたところで今日も夏を楽しみましょう。青い空、エメラルドの海、沢山のお友達……善悪を超越したマリリンパワーが私たちを待っています！ ヤンチャな鮫が出て大丈夫です、ジャンヌお姉ちゃんが付いてますからねー」

——ジャンヌお姉ちゃん。

その言葉を頭の中で反芻する。

何故だろうか、少年は妙にその響きが引つ掛かった。

魚の小骨が喉につつかえたように、延々と消えない違和感。

姉弟なのにイヤらしいことに興じているから、といった類の問題ではない。

もつと根本的な間違い、矯正するべき歪みがあるという警鐘。

しかしその違和感も長続きはせず、ジャンヌお姉ちゃんに肩を掴まれて海へと赴く頃にはすつかりと消え去っていた。

通常、海での楽しみ方といえば砂遊び、貝殻集め、ビーチバレー、サーフィンなどを想起するのだが、ジャンヌお姉ちゃんの場合スケールが一段階跳び抜けている。

どういう訳か、彼女は多くの海洋生物と仲良しなのだ。

イルカのリース、シロナガスクジラのスクールジ、その他大勢の海の仲間たち。

海への祈りに応えてやって来る彼らは少年を快く背中へと乗せ、貴重なライディング体験をさせてくれた。

いや、リースに限っては快くだったのか、少々疑問に残るが。

スピードに付いていけず、少年が背びれから手を離すたび「ルーツカツカツカ」と珍妙な鳴き声を上げていた。

少年は別段、それで気を悪くはしていない。

紺碧の海に身を投じるたび、まるで大きな母性に包まれたような、永遠に沈み込んでいく安心感を得られるからだ。

ゆらゆらと揺れる回遊魚、水面を照らす太陽の輝き、鮮やかに彩るサンゴ礁。

いつそ目を閉じてどこまでも深く潜ってみようかとさえ思える。

視界の端には、白の花柄をあしらった黒ビキニを纏い、同じく海の中で揺られる素朴な少女の笑顔が――

唐突に、ノイズが走る。

視界が塗り替えられる。景色が一変する。

記憶の一端が、映写機のように映し出される。

「簡素な部屋だと聞いていたのだが……結構飾り物が多いんだな。バレンタインのお返し？ 確かにサーヴァントの数も多いからな。個性の豊かな物が集まっても不思議じゃない」

一面が白で覆われた味気の無い部屋に積まれた数多くの贈り物。

その中で、少年はやや色素の抜けた、兎の耳のように跳ねたくせ毛が特徴的なアルビノの青年と言葉を交わしている。

中世的な外見とは裏腹に、物腰の柔らかい落ち着いた雰囲気を纏った彼を、少年は良く知っている気がした。

心が和み、親しみの湧く距離感。

恐らくは友人と呼んでも差支えないだろう。

少年にとって解せないのは、何故彼との会話が映像として浮かび上がっているのかだ。

「……ああ、そのことに關しては、正直……どうコメントしていいのかわかりかねている。本体の記録によれば、以前からお姉さん風を吹かそうとする気はあつたらしいが……夏属性というのは恐ろしいものだな」

色白の肌をやや引き攣らせて、困惑の表情を浮かべる青年。

どうやら自分がナニカを彼に相談したらしいと察した少年だが、肝心の対象について霽がかかったように思い出せない。

「そう心配しなくてもいい。確かに……思わず俺まで二度見するほど羽目を外しているが……●●●●の聖女であることに変わりはない。多少所作が派手になったとしても、本質は同じ……はずだ、うん」

彼なりに記憶に基づいて励まそうとしているのだろう。

だが妙に自信の無い語尾が、かえって不安を助長していることに気づいていない。

しかし、一体何の聖女と言おうとしたのか。

聖女？

「それにしても弟か……俺はここで彼女と接触するのを避けている。だが運悪く水着の方に会ってしまったら、俺も弟にされてしまうんだろうか。それは何だか複雑だ……待てよ、考えようによつてはマスターと兄弟になるわけで、その場合あなたが兄になるのか……？ それはそれで興味深いな」

友人関係にあつても容易には明かさない特別な想い。

世界の裏側、悠久の時を経ての再会というロマンチスト。

そこを除けば普段通りの天然っぷり。

マスターと呼ばれた少年はそんな彼の通常運転に苦笑を浮かべ……

ぷつりと、ノイズはそこで途切れた。

「———どうしました？ 随分とぼんやりして。疲れちゃいましたか？」

姉の呼びかけにはつとすると、少年の身体はいつの間にかスクルージの巨体に乗せられており、浜辺へと帰るところだった。

太陽も西へと傾き、茜色に染まる海が昼間とはまた違った表情を見せている。

鼻をつんざく潮の香に意識がはつきりとしてきた少年は、記憶が途切れていることに気づいた。

確か自分は海に潜っていたはずだ、それで同じく潜っていたジャンヌお姉ちゃんが両手をいっぱい広げていて、素敵な笑顔を浮かべていて、それから……それから？

「リースが張り切つて連れ回していましたから、疲れるのも無理ありません。到着するまで寝てもいいですよ？ それともお姉ちゃんが膝枕してあげましょうか……人目

があるのは恥ずかしい、と。むむむつ、なら戻った後に膝枕ですね。もちろん拒否権はありません」

リース。

彼がクジラまで運んでくれたのだろうか。

確かに物凄いスピードで泳ぐから、思わず意識が飛んでしまった可能性もある。

疲れているのも事実だ。水中だと案外気づかないものだが、汗を流して少々脱水症状気味なのかもしれない。

悩むのは後にしよう、と少年は一旦考えるのを止めた。

抜け落ちた記憶そのものが、重大な見落しであることに気づかないまま。

目を閉じ、波の音に心を同調させて到着を待った。

四・

「ふう。今日もお互い、よく夏に励みました。さ、というわけでお風呂に入りました。温かいシャワーで一日の疲れを流し、心地良いおやすみを迎えるのです」

ホテルの一室に備え付けられたバスルーム。

ジャンヌお姉ちゃんは、さも当然のように少年と一緒にお風呂を済ませようとしてい

た。

「もう一人前なのだから手伝いは要らない？ ダメです。普段ならいざ知らず、今日の弟は激しく癒しを欲しているとお姉ちゃんの勤が告げています。ですので、付きっきりのお世話です」

少年の方はタオルで局部を隠している以外生まれのままの姿だが、ジャンヌお姉ちゃんはどうも何故か競泳水着に着替えていた。

三つ編みの金髪はポニーテールへと早変わり。

水着はポリエステル100%でありながら伸縮性の良い白生地、両サイドの黒いラインが際立つハイカットのデザインである。

普段はその上にジャージを羽織っているが、ここは浴室なので身に着けていない。

なお、黒縁の伊達メガネは何故か外さずそのまま着けている。

ポリシーなのだろうか。

「身体を洗ってあげましょう。この風呂椅子に座ってください、ポンポン」

こうなった以上、テコでも動かないのがジャンヌお姉ちゃんだ。

少年は早々に抵抗を諦め、姉の好意に甘えることにした。

股間にタオルを被せたまま、風呂椅子に腰掛ける。

「まずはシャンプーです。手のひらに馴染ませて、髪全体に……ふつつ、ホテルのアメニ

ティですが、爽やかで濃密な香りがします。このまま優しく撫でちゃいますねー、よしよし」

髪全体をゆつくりと掻き上げる手つき。

少しこそばゆくて、気持ちがいい。

誰かに頭を撫でられること自体、最近は無くなっていた少年だが、このままずっとさらしてもいいかもしれない、などと安心感を得ていた。

「それでは次に、頭皮を洗いますね。耳の付け根から頭頂部に向かって持ち上げるように、ごし、ごし……どうですか？ お姉ちゃんの洗い方は。お上手に出来るといいのですが」

血流の良い顔の際から上の方へ、ジグザクと小刻みに指の腹を動かして洗っていく。それを何度か繰り返すと、今度は円を描くように頭皮を動かしてマツサージ。

脂の溜まりやすい耳の裏、汗をかきやすい首。

細部にも限なく指を這わせていく。

思わず目を細めて心地良さに浸ってしまうほどの手技である。

「ちよつと耳を折りますね……はい、シャワーで流しますよー」

流し残しが無いよう、手にシャワーを当てながら丁寧にシャンプーを落としていく。

適当に洗いがちな髪は、いつも以上に爽快な仕上がりとなっていた。

「これで髪の毛はよし、っと。次は身体の方ですね。ボディソープを泡立てて……」

手のひらを擦り合わせる音が、次第に泡立てる音へと変化する。

頭を洗うだけで済まないことは分かっていたとはいえ、少年はにわかに緊張を覚え、やや背筋がこわばる。

その固くなった背中に、しなやかな指の感触がすつと流れていく。

日に焼けて黒ずんだ肌に白い泡のコントラスト。

肩から腕、背中から臀部、凝りをほぐすように撫でられ、ぴくりと跳ねる少年。

丹念に洗おうと、後ろの姉は次第に身体を寄せる恰好となり、自然と密着する形になる。

——ふにゆん。

競泳水着の上からもはつきりと分かる柔らかさ。

それはスポンジよりも生温かく、当てられるだけで心音が高まる箇所。

人肌より滑らかな水着の生地が、妙に生々しい。

「このまま前にも手を伸ばしちやいますね」

後ろから抱き着くようにして、泡を広げていく。

へその辺りから脇へ、腕を通って胸板へ。

細指がくるくるとなぞるたび、洗われる気持ちよさは違った疼きが与えられる。お

湯に浸かる前だというのに、少年の耳は次第に赤みを帯び、薄色の乳首がつんと上向き出す。

一瞬その上を柔らかい手が通過すると、思わず切なげな声を漏らしてしまう。

「さ、仕上げは下半身ですね。そこは自分で洗う？　もう、今更恥ずかしがらなくても。弟の身体に嫌な部分なんてないのですから、お姉ちゃんにお任せですよ」

にゆつ。

股間に伸びた手が、被さったタオルの中へと滑り込む。

既に興奮から直立し、こんもりとテントを張っていた部分が包み込まれる。

そのまま両手を組み、手を筒状の形にしてにゆこ、にゆこと逸物をゆつくり撫で上げていく。

タオルによって隠され、何をされているか見えないのに性器をやわやわと揉みしだく感触だけが伝わってくる。

それに加えて、艶やかに響く泡の音がよりイヤらしい雰囲気醸し出していた。

「大事な所ですから、痛くないようたっぷり泡立てて洗っていきます……ふふ、背中が震えていますよ。寒くないよう、もつと密着しますね」

つるつるの競泳水着がびつたりと背に吸い付く。

吐息が耳にかかるほど身体を寄せられ、心臓の鼓動がますます早くなる。

まるで湯船の中で膨らませたように、タオルが持ち上がっては沈んでいく。次第に竿を撫でる淫らかな泡音が徐々に間隔を狭めていき、膝の震えが止まらなくなる。

男の声に似つかない甘い喘ぎが、狭い浴室でこだましていた。

「——はい、これで綺麗になりました。シャワーで流しますから、熱かったら言うてくださいね」

青臭い汗を吐き出すまで続けられる。

そう思っていた身体洗いが、唐突に終わった。

寸前で止められた欲望が、少年の中でグツグツに煮えたぎる。

シャワーの熱よりも更に熱く、貪欲に。

朝に吐き出したことなど忘れて、充填されていく。

少年は決意をもって振り返り、姉の名前を呼ぼうとした。

しかし、彼女は既に正面へと回っていたのだ。

タオルを突き破るほどそり立った剛直を一瞥すると、ジャンヌお姉ちゃんはくるとお尻を向け、食い込む水着の生地を指で摘まんだ。

——ビリリッ。

何かが裂ける音。

タオルの布ではない。

向き直った少年は、待ち受けていた光景に目を離せなくなった。

水着が破けている。

伸縮性に優れた特殊素材が、とろとろに濡れた秘部だけを露にしている。

競泳水着を着たままなのに丸見えの聖域は、少年の背徳感をこれ以上なく煽った。

タオルを剥ぎ取り、先端まで真っ赤になった肉棒を現出させる。

風呂椅子に座ったまま、大きく開かれた股の上に足を曲げて覆いかぶさるように、姉

の丸いお尻が迫っていく。

つるり、にゆるり。

宛がう肉棒の狙いが逸れて、ジャンヌお姉ちゃんの肉厚な尻の割れ目をなぞった。

そして、三度目。

「……内緒ですよ。」

——ずぶぶぶつ、じゅぽん。

後ろ向きのまま下半身が落とされ、張り裂けそうな肉竿を啜え込んだ。

その言葉は秘密の合図。

これからイケない秘め事に臨むという、彼女なりの合言葉。

特定の誰に内緒、という訳でもない。そもそも、姉弟でこのような爛れた行為に及ん

でるなどと、誰相手でも言うものではないだろう。

少年はそうやって、自分を納得させていた。

「はあ……あつ、んっ……奥まで、入りましたね……」

滅多なことで動じない姉が、このときだけ見せる濃艶な声。

硬く滾った逸物を膣内へと迎え、ぴったりと型が嵌まった瞬間の小さな息遣い。

絡みつくヒダ肉がきゅんと締めまり、逃さないよう吸い付いてくるとき。

少年は相性抜群の幸福感に思考を溶かされ、全てを姉へと委ねてしまうのだ。

「おちんちん、ぴくぴくして今にも泣いちゃいそうです。お姉ちゃんがすぐに、溜まったモノ全部頂いちゃいますね……」

ゆつくりと上下に動きながら尻を突き出し、肉壁を満遍なく竿に押し付ける。

時折かき混ぜるように腰を左右に回して、膣内のヒダを絡ませるのも忘れない。

分泌された蜜汁が肉棒へと滴り、一往復ごとに止めどなく溢れてくる。

そんな粘液のるつぼでありながら、きつく締め付けて扱き上げてくる緩急まで備わっている。

勝てない。

脳が馬鹿になるほど焼かれる姉快楽に抗えない。

結合部から響く湿った淫音を、少年は骨の髄まで刻まれていく。

「んっ、んんっ、はあっ、腰の動き、止められなくて……ああん、あっ、これではお姉ちゃんの方が、ううん、浮かれてるとバレちゃいます、くうん」

肉棒が奥へ、奥へと打ち付けられるほど、少年は次第に腰を持ち上げて更なる密着を求めていく。風呂椅子にべったり付いていたはずの手はいつの間にか尻肉を掴み、振動でふるんと弾む感触を楽しんでいた。

「? ……腰に手を回して、もつと前のめりになりたいですか。目一杯体重をかけて、お姉ちゃんに甘えたいんですね。ふふっ、許します。弟のお願いを受け止めるのも、姉の役割ですから……さあ、おいで♡」

——ずぶぶうううう、ぼすっ。

背中から抱き着くように腰を押し付けて、膣の最奥まで広げていく。

そこからはまさに獣の交わりであった。

快楽を貪るためだけのショートストローク。

膣内を抉るたびにきゅっつと締まる蜜壺。

尻肉は波打ち、汗は飛び散り、膣奥をひたすらノックする交わり。

女体の行き止まりに荒々しいピストンが叩きつけられるたび、姉の威厳の欠片もない

淫らな声が零れた。

「ひっ、はひっ、んっつ、当たっちゃってます、弟クンのが、お腹の奥にい、ふうー、ふうー、ひゃあ、あつ、ダメ、お姉ちゃんの方が先に、溶けちゃ……あうん、あつあつあつ、先っぽが膨らんで、これ、もう出ちゃいますね、お姉ちゃんの中に注いじやいますよね、ううん、いいんです、このまま一緒に、ひゃん」

いつの間にか床に肘を付き、お尻を突き出して蕩ける顔を隠そうともしない姉。

普段の強情っぷりから想像もつかないほど甘く誘う彼女に、いよいよ射精欲が弾け勢いよくザーメンが駆け上がっていく。

好き、好き、ジャンヌお姉ちゃん大好き。

甘ったるい感情を吐露しながら、震える怒張を最大限に押し付け、子宮内部へ大量の精液を放出する。

忽ち熱い雄汗が子宮壁を満たすと、それに連動するようにジャンヌお姉ちゃんの身体が激しく痙攣した。

オーガズムを迎えつつ、腰をくねらせて一滴残らず搾り取ろうとする淫靡な膣穴。

射精の脈動に合わせて締め付けの強さが変わり、絶妙な快感を与えてくれる。

このまま玉袋が空っぽになるまで、弟の子種を搾り取り独占してしまうのだ。

余りに長い吐精で脱力したのか、少年は息を激しく切らしながら汗だくの競泳水着の背に抱き着いてしまう。

その反動でちゅぽんと抜けた肉棒。

飛び出た残り汁が競泳水着の生地へとかかり、そのまま垂れ落ちていく。

「はぁー、はぁー、ふう……今日もよく、頑張りました……んっ……」

預けられる体重の重みに、ジャンヌお姉ちゃんはいつもの優しい笑顔を浮かべていた。

……

……

……

n o w h a c k i n g …… O K !

「BB——、チャンネル——！ IN ラスベガス——！」

「ぷぷぷつ、今まで楽しんでたイチャラブはどこに？ なんてお間拔けな顔を浮かべて、期待を裏切らない反応ありがとうございまーす」

「というわけで、水着剣豪第五カジノにて、哀れにも姉を名乗る不審者の洗脳光線を浴びてしまいBAD END一直線のマスターさんをからかい倒す、特別出張のBBチャンネルです——！」

「……はあ、一体何を言っているんだろうこの人は、的々第三者視点を向けるだなんて、相当頭がお花畑になってますね。もしかして、綺麗さっぱり忘れちゃいました？ これにはラスボス系……もとい、ルルハワ邪神系後輩のBBちゃんといえども辛いです……一度見たら忘れないインパクトには自信あったのに……トラウマ級の楽しい思い出だっていっぱい作ってきたのに……モチベーションガタ落ちです……」

「ま、それでもすぐに立ち直ってしまうのがBBちゃんの良いところ、なんですけどね！
いつまでも弟テクスチャ貼り付けられて、泥沼に囚われてる誰かさんとは違いまーす」

「と、これだけ言っても気づく様子はナッシングですか。あの人、英霊としての逸話に洗脳の要素なんて微塵もないのに、一体どこからスキルを引つ張り出したのやら……それは水着のBBちゃんも同じでは、つてあれれ？　ちよつと記憶が戻ってきちゃいましたー？　邪神系ヒロインツリーに開眼した話、思い出しちやいましたー？」

「まあ、これは単なる推測に過ぎないんですけど——イルカのせいかもしれませんよ？　何の話つて、相変わらず文脈の読めないマスターさんですねえ。ジャン又さんがちよつとハジけた原因ですよ。あつ、ごめんなさーい。今のアナタにとつてはジャン又お姉ちゃん、でしたっけ」

「知つての通り、名状し難いナニかと交信してしまったBBちゃんは、ノリノリでニヤルニヤルに人類の健康を管理する万能AIへと分岐しました。つまり、かのトリックスターの性質もエミュレートしているということです。そんなわたしがちよつと気持ち悪い、格下のくせに足を引つ張るのだけは上手くてうざーい、なんて感情をあのイルカに抱いてるとしたら、どう思います？」

「分かりませんか？　分かりませんかあ？　もしこの場にマシユさんがいたなら、ピンと来たかもしれませんねえ。アビゲイルさんと出会つて以来、そつち系の小説も熱心に調べていたようですよ……え、ジャン又お姉ちゃんはフォーリナーじゃないのはどうしてか、ですか？　むむつ、豚さんにしては鋭い着眼点、なーんて褒めると思いました？」

褒めません☆」

「何故ならそれは、とつても簡単な理屈だからです。だって——元々地球に息づいている存在を、領域外の生命体とは呼ばないでしょう？ 厳密にはそのものが出張つてるのではなく、あの海洋生物を通じてのパトロン、ぐらいの距離感でしょうか。どの道、ただの人間に過ぎないマスターさんが出会ったら即廃人コースです。そこは偏に、ジャンヌさんの鉄壁の精神力の賜物でしょう」

「以前私が『時間の檻』を発動した際は、XXさんという天敵のせいではぶち壊しにされちゃいましたけど、今回はだあれの助けもありますよ？ 勿論BBちゃんも助けたりなんかしません。お株を横取りされたようで複雑な心境ではあるんですけど……ジャンヌさんの趣向に合わせて、『姉空間』とでも呼びましようか。ここで永遠に、いつまでも、彼女の弟として有り続けるコト。それが、アナタに定義された『幸福』なのですから」

「ふふふつ、出張BBちゃんネルもそろそろお開きの時間です。意地を見せて抜け出すのか、それとも自分の名前を忘れて永遠に甘えん坊さんの弟でいるのか。せいぜい楽しませてくださいね、愉快的オモチャのセ・ン・パ・イ——」

……

.....

五.

誰かに呼ばれていた気がする、と少年は思った。

こここのところ見覚えのある幻覚、あるいは夢が頻発していることを訝しんでいるものの、そのことを姉に相談しようとするといつの間にか頭から抜けてしまうのだ。

故に少年は結論付ける。

きつと大したことのない些事なのだ。

「お部屋を先に涼しくしておいて正解でした。おかげで快適な膝枕タイムを過ごせてお姉ちゃんも嬉しいです」

浴室での熱い交わりの後、いつもの水着姿に戻ったジャンヌお姉ちゃんは、弟に有無を言わず膝枕へと持ち込んでいた。

見かけに寄らず筋力があるためか、大腿部が固くないかをやや気にしているようだ。

少年からすれば、それは全く問題なかった。

頬を擦り付けたくなるほど瑞々しく、柔らかい太もも肌である。

「お風呂上がりでなければ耳かきもしてあげたかったですね、次の機会にお預けです。夏はまだまだこれからですし、焦らず楽しみましょう。私のかわいい、かわいい弟」とジャンヌお姉ちゃんは言ったが、その指は少年の耳輪や耳たぶへと伸びてソフトにほぐしている。本当は今すぐにでもしてあげたいらしい。

「この穏やかな夏の時間こそ、平和の象徴と言っても過言ではないでしょう。それは同時に、保ち続けるのがとても厳しくもあります。でも、弟のためならいくらでも頑張っちゃいますよー。なぜならお姉ちゃんなので！ えへへー」

時折、少年はこの姉の言う「夏」にどれだけの意味が含まれてるのか、分からなくなる。それでも確かなことがひとつ、ジャンヌお姉ちゃんは決して自分を見捨てたりはしないということだ。

絶対的で、唯一無二の事実なのだ。

それが彼女の言う、「姉」なのだから。

「それにしても……やはり、代償行為が必要ですね。このままではお姉ちゃんとしての気が済みません。どうしましょうか」

いつもの強引さが発動しつつあると察した少年は早急に離れようとしたが、時既に遅しである。短パンの上から擦ってくる手が、未だ熱の抜けない箇所へと伸びていた。もう二回も精を吐き出したのに、まだ足りないと言わんばかりに膨らんでいく男根を見つ

けられてしまったのだ。

「そういえば、弟くんが一番好きなアレはまだでしたね。誤魔化してもダメですよ、もう視線が釘付けですし……お姉ちゃんのおっぱい、今日もしてほしいですか？」

ビキニに手を添え、見せつけるように胸を持ち上げる。

それだけで少年は口ごもってしまふ。

何をされるのか、それがどれだけ気持ちいいのか。

全て直接、身体に教え込まれている。

「よしよし、すぐに鎮めてあげますねー。また汚れても、お風呂に入れば済む話ですから。あっ、その時は弟くんがお姉ちゃんを洗うというのはどうでしょう。ふふっ、顔が真っ赤になってます……想像しちやいました？」

天使の羽根が舞うかのように、洗練された女体。

何度もその目に焼き付け、貪った身体を好きに洗っていいと誘われたら、邪な想像の一つや二つ即座に浮かぶのも無理はない。

しかし今はそれ以上に欲情を煽るものが目の前にある。

少年は名残惜しくも膝枕から離れ、ベッドに座って自分から足を広げる。

その間にするりと入り込んだジャンヌお姉ちゃんは、ベッドの下の引き出しを開けて小瓶を取り出し、中の潤滑液を両胸の間へと垂らしていく。

ぐちゅぐちゅぐちゅ。

互いに擦れ合う胸から洩れる粘質な音に、少年の期待は際限なく高まってしまふ。そして準備が終わると、再び硬さを取り戻した竿の先端へ谷間を宛がい、豊満な胸肉の中へとゆつくり呑み込んでいった。

——ぷにゆり、ぷにゆり。

勃起を優しく包んで隠してしまう、おっぱいマッサージ。

膨らんだ両乳首を鏡のようにぴつたりと合わせ、逸物はすつぽりと乳筒に収まった。

黒ビキニによるゆつたりとした乳圧が、興奮した肉棒を甘やかしていく。

「はい、弟クンの大好きなおっぱいに挟まれちゃいましたね。もう、足をピンと伸ばして深いため息を付くなんて、よっぽどこれが恋しかったのですか？」

コク、コクと何度も必死に頷く少年を可愛らしく思ったのか、ジャンヌお姉ちゃんはにつこりと笑い、たぶん、たぶんと胸を揺らし始めた。

競泳水着のときよりもはつきりと分かるその大きさ。

下から掬い上げるように両胸を持ち上げ、ぎゅつと圧をかけて竿の根本まで降ろしていく。吸い付く乳肌に揉みこまれ、下半身ごとふんわり蕩ける快感に少年の背が小刻みに震える。

「それにしても、我が弟ながらここの旺盛ぶりには驚いてしまいます。ほら、あんなに出

したばかりなのに、おっぱいの中で硬くなって……これは念入りにほぐしておかないと安眠できませんね♡」

——にゆつ、にゆつ、にゆる、にゆつ。

両手で拳を握るように乳肉を押し付け、ローションで滑りの良い乳内を搾り上げる。竿の根本に当たると、垂れた我慢汁と潤滑油の混じった淫液が陰毛をべたつかせていく。

ジャンやお姉ちゃんは乳房越しても手に取るようにツボが分かるらしく、亀頭を責めるときには左右で揉み込む動きで重点的に抜き上げ、竿全体を愛でるときは長いストロークでゆつたりと胸の重さを感じさせるパイズリを披露する。

気持ちよさに耐えかねたのか、座っていたはずの少年は上体をベットに投げ出し、膝が完全に伸びきっていた。

「あー……♡ そんなに顔を緩ませて……いつものことながら、おっぱいに包まれるとすごく無防備になっちゃいますね。ん？ もうイキそう？ お姉ちゃんの水着おっぱいに射精しそう？ ふふつ、もう少し楽しんでもらっても良かったのですが、仕方ないですね……良いですよ。いーっぱい、夏の情欲を注いでくださいね♡」

許しを得たのとほぼ同時に、みっちり合わさった谷間から精液が噴き上がるように飛び出してきた。

暴力的に放たれる白濁のマグマは、乳内だけでは収まりきらず黒ビキニの上にも着弾し、滲んでいく。

乳内射精の脈動が終わるまで乳房をぎゅっと抱き締め、たばん、たばんと尿道の残り汁を全部出し切るまで促した。

「三回目だというのに全く衰える気配がないなんて、お姉ちゃんのおっぱい好き過ぎですよ弟クン♡ それに何だか、かえって元気いっぱいになっちゃいましたし……どうせならもつと内緒のコト、しちやいますか？」

お姉ちゃんがそう言うなら、もつと甘えてしまおう。
甘えてしまえばいい。

少年は完全に屈服した顔で、またコクコクと頷いた。

秘密の姉弟スキップに歯止めは効かず、よりアブノーマルな方向へと傾いていき。

深く、深く、深海よりも深く、暗黒の海域に理性は落ちていく。

「ちゅ……ん……こんな体勢でおねだりしちやうなんて、かわいい弟……♡」

四つん這いになった少年からドロドロの喘ぎ声が上がった。

肉厚な姉舌が、竿の裏から尻へと押し当たる。

優しい接吻をされながら、ぶら下がった肉棒を胸へと突き入れる法悦の時間。

熱い吐息を浴びせられるだけで落ちていく。

腰が崩れて、たわわな乳房に竿が埋まっていく。

不浄の穴から伝わる熱気と、みっちり張り付いて離れない乳肌。
抗えない。

尻の皺を伸ばすように舐め回される。

ずるりと腰が落ちる。

ぐりぐりと舌が尻奥へと押し込まれる。

逃れる力も残っていない。

じんじんと、脳天にまで染み入る温かさ。

頭頂部から再び股間へと快楽の信号が戻ってきたその時、ぎゅつと胸を締め付けられた。

どぶぶう。

吐き出す。再び溜まった劣情を合図も無しに母性の象徴へと吐き出す。

軽く腰が痙攣するだけで、焼けるほどに蕩けた谷間が屈服の液で満たされる。

気持ちいい。

もう、ずっとこのままでいい。

少年は永遠に戻れない。

自分が何を志し、何に負けてここにいるのかさえ——いや、何者かさえ抜け落ちて。

鮫のサーカスの演目、終わらない姉の愛に全てを塗り潰され。

▪ 幸福に満ちた夏を過ごすのだった。

——コスザール魔術神、という言葉がある。

かのマハトマ女史であるエレナ・ブラヴァツキーが自身の著書でも用いた単語だ。

そしてあの神話に登場する旧神にも、そう呼ばれて信仰された存在がいる。

貝殻の戦車に乗り、イルカなどを使役する大魔導師。

夢見人を気まぐれにドリームランドへと誘う住人。

無貌の神・ニヤルラトホテプを妨害する者。

もし、あのイルカのリースに鍵があるのだとしたら。

巨大な鮫をも難なく従え、リヴァイアサンを司るラムダリリスさえ遂に正面から渡り合うことはなかった、強大な海の権能。

生前の最後まで、海への憧憬を抱き続けた彼女だからこそ。

思わぬ形で相性が良かったのだとしたら——
所詮はこれも、夢の断片である。

——みよん、みよん、みよん。